The Lepidopterological Society of Japan

江　崎　氏　の　青　春

戸　沢　信　義

緒方君から故江崎悌三氏の葬儀の前日来信があり，同氏の事を何か書いて欲しい，尚それに珍らしい写真があれば是非添えて呉れとの御依頼がありました．

江崎氏と私との少年時代の事については，これまで度々お互に書きあったから，2人の仲は言わば透明な硝子箱の標本の様に周知の事と思いますが，今私の手許に大変珍らしい写真がありますので，それを材料として，その時代の思出話を書いて見たいと思います．

此の写真は江崎氏が鹿児島第七高等学校造士館に在籍した時，私に送って来たものであります．江崎氏自身はその事についてはすっかり忘れてしまったと見えて，1939年関西昆虫雑誌第5巻3号を故寺西暢氏の追悼号とした時，江崎氏は珍らしい写真をつけた一文を寄越して来ましたが，その時「君の珍らしい写真も1枚あるから，何れ折があればこっそり発表して驚かしてやるよ」と云いましたから，私もそれに応じて，この写真の事を申しましたが，江崎氏は嘘だと云って一向取り合いませんでした．

今日哀しくも2人は幽明境を異にして，江崎氏の驚く顔を見る事の出来ないのは誠に残念な事であって，哀惜の情真に胸をかきむしられる様な感があります．

それにつけても，今夏江崎氏の来阪を機に在京阪神の蟲人相集って一夕の歓を尽さるゝについて，わざわざ緒方さんから懇切な御招待があったのに，僅かな俗用の為不参，遂に江崎氏と最後の会談の機を逸した事は返えす返えすも遺憾に存じて居ます．

その節の御親切と云い，此の度の執筆の機会を与えて下さった緒方さんの御厚誼に対し心から感謝の意を表します．

又読者の皆様に御詫びしておきたい事は前述の通りの事情に甘えて，貴誌の記事内容と遠くかけ離れた昔話を書きましたが，これも吾々の等しく敬慕する偉大なる先輩の人間的な一面を知って頂く事も必らずしも無駄でないと何卒御海容下さる様御願いします．

江崎君と音楽

大学教授になってからの江崎君は音楽の音の字も知らない顔をしておったけれ共，あれで仲々好い声をして，音程も確かであった．私達が初めて音楽の趣味を感じる様になったのは中学校の3年生の時，英語会話担当の米人 STRICKLAND と云う教師が有名な FOSTER の My Old Kentucky Home を口写しに教えて呉れた事に初まる．

江崎君は謄写版刷の楽譜をハアモニカで何度も鳴らして見て，どうも先生の歌い方に間違った所があると言って，次の時間にそれを指摘して，皆を驚かしたものである．

私達はこれが病みつきとなって，それからLong long agoとか，Upidee, Old Black Joe, Mermaid 等を次から次えと稽古したものである．夜遅く江崎君と私は何方かの家に訪問しての帰り，相手を見送りがてら北寺町の淋しい通りを Mermaid 等を何度も合唱して歩いた．当時私達の text は “101 Best Home Songs” とか云った粗末な楽譜集で，江崎君は半分以上も歌える様になったと自慢しておった．

江崎君のハアモニカ吹奏技術は音楽的に決して優秀なものとは云えなかったが，専ら音程の練習の為に切りに吹いておったが，当時吾々の買える様な安物ではどうしても出ない音階があって，不満に思ってか，「ハアモニカは所詮玩具であって楽器ではない」と喝破して，後には省みなくなった．

NII-Electronic Library Service

The Lepidopterological Society of Japan

江崎君がセロを弾き出したのは第七高等学校へ入学してからであるが，その素因は中学時代からあった．いつであったか江崎，野平両君が杉谷岩彦氏を訪問した時，同氏の演奏を聞いて大いに羨望したのが動機となったのだと思う．当時の杉谷氏の技倆は相当なもので，音楽会にも出演せられたと聞いておる．

首尾よく高等学校へ入学したお祝にセロを入手した江崎君が得意になって，早速私に報告して来たのが，こゝに御覧に入れる写真である．演奏しておる場所も妙な所であるが，江崎君の他に類例の少ない偉大な頭蓋の形が斬切り頭の為に明瞭に写し出されておるのも今となっては涙の種の記念写真である．

江崎君と少女歌劇

江崎君の音楽熱は当然宝塚少女歌劇の愛好者となったのは自然の成行きであった．今こそ宝塚歌劇は女の見る物となっておるが，その頃の観客の大部分はニキビ面の中学生ばかりであった．当時の小林一三氏の抱負を聞いても，これによって青少年の西洋音楽の智識を大いに普及すると云うにあったから，純粋の西洋音楽を聞く機会の少なかった当時，音楽好きの青少年は何れも宝塚の愛好者であった．

所が規律厳格を以て世に有名な北野中学校では絶対に宝塚へ行くのを禁じておった．これは学業を忽かにして，宝塚へ没頭する生徒の輩出したばかりではなく，吾々の通学の途次宝塚の女生徒と出会う機会が多く，仲には親密な交際をする者もあったから，学校当局者としてはむしろ当然の処置と云わねばならなかったであろう．

私達が初年級の時，当時のトップスタア雲井浪子（本名は高井浪子，1899年生れ，只今は早稲田大学文学部教授？坪内士行夫人）の母の葬式があった時は校内割れる様な騒ぎであった，と云うのは雲井の家は私達初年級の教室のある3号館と塀一つへだてた北側にあり，2階の廊下から見ると，宝塚の全生徒が葬儀に参列しておるのがまる見えであったから，大部分の上級生が体操の教師の声をからしての制止をこえて，殺到して来て，吾々初年生を驚かした事があった．

江崎君が特に少女歌劇を好んだのは今思えばその環境が然らしめたものと思っておる．第一に江崎君の家は北区新川崎町にあり，その方面から通学する同級の生徒の中からは宝塚の事を聞く機会があったと思うし，それらの不良？生徒と一緒にお玉さんと云う元宝塚におった女の子が女給をしておる福島にあった「くれない」と云うカフエーへも1～2度行った様に思う．（此のお玉さんは只今肥後橋南詰で Venus と云うレストランを開いておる）

第二は江崎君は組でも背が高い方であり，教室では座席が最後列にあった．背の高い同じ仲間には年長者即ち落第生も多く，それらの多くは歌劇熱に浮かれて学業を怠った為もあったから，授業中に教科書の間にプログラムや写真等を挟んで廻覧したりした連中に交っておったから，自然その熱に侵される可能性も多かったと思う．

私も音楽は好きだから，江崎君から色々宝塚の事について啓発される事昆虫の智識と殆んど同じ位であったが，小心な私はとうとう一度も禁を侵して宝塚へ行かなかったが，江崎君は毎公演毎（その時分は春秋2回又は年4回であった）に通ったものであった．甚だしいのは学年試験の前日の休日にも秘そかに教師の目を逃れる冒険をした事もあった．

江崎君の当時の理想は箕面へ昆虫採集に行ってその帰りに宝塚へ立寄って，夜の公演を見て帰る事であった．一度等は昼間私と一緒に箕面へ虫捕りに行っての帰り，石橋で私と別れて一人で宝塚へ行った事もあった．

これ位の宝塚少女歌劇愛好位なら何も言う事はないが，話はこれからである．これまで長々と書いたのは言わば次に述べる江崎君らしい愛好振を説明する枕言葉に過ぎない．

それについては江崎君の唯一の証拠品が只今どこへ仕舞ったか見当らず，写真で復写して皆様に御目にかける事が出来ないのは非常に残念であるが，それは江崎君が親ら書いて私に呉れた当時の宝塚の女生徒の名簿（芸名と本名）それに私達2人だけに通じるギリシヤ文字の暗号が付してあった．例えば

高峯妙子は山だから Mountain の μ

雲井浪子は浪だから Wave の ω

高浜喜久子は浜だから peach の π

篠原浅茅は素顔がおでこだから Δ とする等

尚驚くべき事には江崎君の原簿には更らに委しく，生年月，住所も書き入れてあった．ある時野平君が宝塚へゆき，歌劇のえはがきを呉れて，それに江崎君と私が仲好くダンスをしておった通信しておった．

江崎君の憧憬は2人あった．1人は間もなく退いて豊中駅附近の八百屋のおかみさんになった．後年何かの序に豊中へ下りた江崎君はその店先を通ったと見え

NII-Electronic Library Service

The Lepidopterological Society of Japan

て"σ"は健在で何よりと書いて来た事がある.

もう一人は前記のπに当る人で，美人の誉高く，山本駅附近の駄菓子屋の娘であったが，私より2～3年下級のKと云う金満家の息子に望まれて所謂玉の輿に納った．戦前江崎君の話によると，同君の厳父君の名代になって有名なKの山崎別荘に招待されて行って端なくもその昔の麗人の姿を垣間見たとの事.

斯うした江崎君の歌劇愛好熱は鹿児島へ行ってからも，東大時代もずっと続いておって九大に納まってからも尚，江崎君の希望で宝塚で発行する脚本，雑誌，絵葉書，プログラム等を欠かさず私の手から送っておった.

江崎君が独逸から帰り，私が宝塚文芸図書館におった時，雑誌及脚本集を全部同図書館に寄贈して来たが，雑誌は私の友人であるレヴユウ作家として有名な白井鉄造氏が今も愛蔵しておる.

尚面白いのは1923年宝塚劇場が焼けた際大切な歌劇の原譜の大部分が焼失してしまったが，その後その内の1つを再上演するについて楽譜がなくて困っておった際，私から頼んで，江崎君が少年時代せっせと写しておった melody の楽譜を借りて，漸くその歌劇の公演の間にあったと云う秘話をこゝに洩らして，江崎君の当時の歌劇愛好の功績を讃えておく.（終り）

ぐろおりあ　ぷれしでんてぃ

磐　瀬　太　郎

江崎先生がなくなられた．覚悟してはいたものの，余り急に現実となったので，まだほんとに身にしみて悲しさに徹し得ない．つい二月ほど前10月10日の午後に，「世界の昆虫展」会場でお別れした時のまゝの印象である．先生も疲れておられたが，私もその夕方から寝込んでしまった位妙に疲れていたので，何となくお別れしてしまった．そののち11月24日に21日付のお元気なお便りを頂いて，ちようどＮＨＫの出張で九大を訪れる昆虫・鱗翅両学会員高倉忠博氏のことを，"楽しみにしております"と書いて来られたが，先生は既にその時23日から流感で床につかれ，高倉氏も奥様にお目にかゝっただけで帰って来た．このかりそめの御就床が先生の最後の御病臥となり，頂いたお手紙は私に関する限りは絶筆となった.

2年前の夏1955年8月14日に，御上京中の先生が朝比奈正二郎氏と共に，私の家を訪ねて下さった．玄関にお迎えした先生の頸に大きく腫れが来ており，思わずハッとした．お若い時南方の島で蚊にさゝれたための腫れものでしようなどと，その場は冗談めかしておいたものの，ついその2～3日前に，岸本英夫東大教授が頸部のガンの大手術を受けた時の手記を，読んだばかりのところであったので，非常な不安を覚えた．先生は続いて9月末にも上京され，銀座のグリーン・カウでレピ仲間の会合があったが，腫れは少し大きくなった様で心配は増加した．10月中旬には鹿児島で日本昆虫学会の大会があるので，先生はそのつもりで福岡へ帰えられたが，10月6日には御入院，つゞいて第1回の手術となった訳である．御病気の性質は岸本教授のと似ていたが，そうとわかっては手術の成功に最後の望みをかけて祈るばかりであった.

当時先生は九大の教養学部長もやっておられたため，久留米分校の合併問題で殊のほかお忙しく，翌1956年の春には3月末，4月下旬，5月中旬と続いて3回も上京，文部省との折衝を重ねておられた．日本昆虫学会の方でも，1月には40周年記念事業の準備委員が指名され，3月には記念事業計画案が出来，この計画の矢は既に弦を離れていたが，夏の始めには先生の再手術の噂が入って来た．安松助教授はアメリカに留学中であり，我々準備委員の気持ちは暗澹たるものであった.

この頃東大の尾高朝雄教授のペニシリン・ショック死の事件が起ったが，先生は尾高教授と渡正監氏への追想を書くと言い出され，私に渡家の資料などを依頼された．出来上った原稿は新昆虫9巻9月号に載ったが，非常に情と熱のこもったものであって，校正の際その末尾の一節を読んで私は泣いた．家の者に驚かれる程涙をボロボロこぼしたものであるが，今こゝにあらためて読みなおして一層かなしい思いがする.

"尾高さんの兄弟にしても，渡さんにしても，人並優れた才能のある人達が，相ついで天寿を全うせずし

NII-Electronic Library Service